都幾川宮ヶ谷戸前堰（ときがわ町新玉川橋上流）での

稚アユ標識放流作業報告―H25 年 5 月 2 日（木）―

1．作業は、現在溯上出来ない宮ヶ谷戸前堰の上で、荒川流域ネットワークの責任者（岡里さん、鈴木さん）から、挨拶と説明を受けながら行われた。
稚アユ運搬車は、荒川本流秋ヶ瀬堰下流にて採捕した 10Kg（約 5000 匹）を生簀のまま運び左岸側堤防で待機していた。

2．稚アユ運搬車から、都幾川に作った作業用生簀（竹と青色ネットで区画）まで、バケツリレーで運ぶために一列に並ぶ。

3．バケツリレーで運ばれた稚アユは、一旦「都幾川生簀」に集められた。
運搬車から都幾川まで降ろし、運ぶのは一連の作業内容で、一番のチカラ仕事となります。
（青い車が、漁協の運搬車です）

4．埼玉県環境科学国際センターの金沢部長が、生簀から取り出した標識をつける稚アユ群（約 50～100 匹）に、軽い麻酔をかけて暴れない様に処理する。
　重くかけると麻酔から醒めずに、横たわって死ぬ場合が多い。

5．平均体長 7.2cm、平均体重 1.4gなので、そのアブラビレは、2mm×3mmぐらいの非常に小さなものである。
　小型のハサミ（100円ショップで売っている鼻毛切り用）で、実際にカットしてみせる。

6．5人一組の作業班を組織して、一人はカウンター計数機で、標識尾数を数える。
　外の4人は、暴れる稚アユを掴み、唯ひたすらにヒレを切除して概ね 200匹／1人のノルマを頑張る。
　4班（20 人強）の作業風景。

7．水温は 14℃、気温も 14℃と、比較的寒い天候の中で行われたので、徐々に手が悴んでくる。

容器の中の稚アユは、麻酔がかかっても元気なものだが、その分、手の中で跳ね回り･暴れまわる。

ツルリと指間や手から抜け出て、そのまま逃げてしまうヤツも多い。計数の対象外だ。

8．2時間ほどで、生簀の中が漸くカラになってきた。

各班から、標識をつけて放流した尾数の報告があり、集計した結果 4,181尾が宮ヶ谷戸前堰より上流で成長することになった。

漁協でも稚アユを放流するので、釣り人に広報して、アブラビレのない標識アユを何処で釣ったか、今後も追跡調査は続く。 約 2,000 匹の稚アユも槻川に放流されて、溯上可能範囲を追跡し、生息･溯上範囲を推定することになる。

9．今回の標識放流作業には、荒川左岸域（熊谷、鴻巣）や荒川上流域（秩父、寄居）の方々も多く参加されていました。作業終了後に、全員でスナップ写真を撮影。

ここ、都幾川宮ヶ谷戸前堰も、現在はアユが登れない溯上阻害箇所になっている。

昨年より、ときがわ町産業観光課での魚道整備･堰改修の検討会が、市民団体（もりんど）も加わって開催されてきた。工事着工は、H26 年度以降と予想されるが、荒川本流からの天然アユ溯上が早期に実現することを期待して止まない。

（文責：事務局　渡辺　仁）